国語科学習指導案（３年２組）

令和元年 10 月 29 日（火）14：00～14：50　図書室

１　単　元　　文章を比較して読み、よりよい表現の仕方について考えよう
教材名　『故郷』（光村図書　国語３）

２　単元設定の理由

(1) 教材観

①学習指導要領上の位置付け

［知識及び技能］

(1)イ　理解したり表現したりするために必要な語句の量を増し、慣用句や四字熟語などについて理解を深め、話や文章の中で使うとともに、和語、漢語、外来語などを使い分けることを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。

［思考力・判断力・表現力等］

Ｃ読むこと(1)ウ　文章の構成や論理の展開、表現の仕方について評価すること。

Ｃ読むこと(1)エ　文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見をもつこと。

②設定する言語活動

本題材の学習では、「文章を比較して読み、よりよい表現の仕方について考えよう」という言語活動を設定した。教科書の文章（竹内好訳）をもとに、別の翻訳文２種類（井上紅梅訳・藤井省三訳）を比較しながら読む活動を行う。使われている表現や語彙を吟味しながら文章を比較することで、物語の内容や作者の思いをより感じ取れる表現はどういうものか、それぞれの表現の仕方について意見を交流させて自分なりに評価し、考えを深めることができると考える。

③単元の価値

「故郷」は、二十世紀前半の中国を舞台とした、魯迅の作品である。時間の経過によって変化した風景や人、人間関係などの中国の庶民・社会の姿を描き、作者の考え方がよく表れた作品であるといえる。教科書では、比較的生徒にも理解しやすい、平易な表現で翻訳された竹内好訳が使われているが、別の翻訳と比較してみると、それぞれの翻訳者の意図や思いが文章に表れていることがわかる。本題材では、教科書の文章をもとに、それぞれの翻訳文を比較しながら読むことができ、表現の仕方について評価し、その文章から考えを広げたり深めたりして、自分の意見をもつことに適した題材である。

④単元の系統性

・第２学年「盆土産」「走れメロス」で、「文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすること」を学習した。

(2) 生徒観（男子 15 名、女子 14 名　計 29 名）

①既習の学習内容や活動

・４月に、「文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考えること」の指導事項について、「批評（観点を定め、作品の特徴、価値などを考える）」を意識して、考えたことを伝え合う活動を行った。

②本題材に関わる生徒の実態

・知識及び技能について、生徒は、日常接する言葉についてあまり敏感ではなく、意味がわからなくてもなんとなくそのままにしてしまう様子が見られた。そこで昨年度から少しずつ、２学期から本格的に「語彙」についての知識を増やし語感を磨くために、自分たちの身近にあるところから言葉を集め、意味を調べて、その言葉を使った文章を作る、という活動を行っている。さらに本題材で、翻訳の異なる文章・言葉について自ら考え、周りの意見を聞きながら語感を磨き語彙を豊かにすることができるような場面を設定していく。

・思考力・判断力・表現力について、１学期に、文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考える題材で、文章を批評して、考えたことを伝え合う活動を行っ

た。生徒は、文章の良い点、良さが伝わる部分については多くの気づきがあり、良さを評価することができた。一方で、文章を批判的にとらえることについては、ほとんど意識が向かなかった。そこで、本題材で、他の翻訳の文章と比較しながら読むことで、時代背景や伝えるべきことを踏まえてどの翻訳が妥当であるかを吟味し、考えを持ち寄って広げたり深めたりしていくことを意識しながら文章を読むことができる場面を設定していく。

(3) 指導観

・文章を比較して読む際の比べる言葉を、生徒の発見した疑問や語彙をもとに設定することで、生徒が主体的に本文を読み、語感を磨き語彙を豊かにすることができるようにする。

・文章の構成や論理の展開、表現の仕方について評価する際に、観点を明示して考えたことを伝え合うようにすることで、言葉の選択や評価内容の妥当性について自分の考えを深められるようにする。

３　単元の目標

語句の量を増し、磨いた語感と身に付けた語彙を生かして異なる翻訳文を読み比べる活動を通して、文章の表す内容や描写、状況（時代背景）について評価しながら読み、当時の人間、社会などについて理解しより適切な語句を選んで使うことができる。

※　**４　指導と評価の計画**　／　**５　本時の展開**　は、次ページに

4　指導と評価の計画　　国語　　３年　題材「故郷」（全７時間計画）

目標	語句の量を増し、磨いた語感と身に付けた語彙を生かして異なる翻訳文を読み比べる活動を通して、文章の表す内容や描写、状況（時代背景）について評価しながら読み、当時の人間、社会などについて理解しより適切な語句を選んで使うことができる。
評価規準	【知識・技能】語句の量を増し、より適切な語句を選んで使うことができる。 【思考・判断・表現】文章の表す内容や描写、状況について評価しながら読み、当時の人間、社会などについて理解し、自分の意見をもつことができる。 【主体的に学習に取り組む態度】言葉がもつ価値を認識し、より豊かに想像して、思いや考えを伝え合おうとしている。

過程	時間	目標・課題	学習活動	振り返り	評価（方法・観点）
つかむ	1	◎物語を通読し、感想を伝え合うことができる。 物語を読んだ印象はどのようなものだろうか。	○本文を通読して概要をつかみ、初発の感想を交流する。	☆作者が生きていた時代の中国を描いた話だが、暗い雰囲気が感じられるな。	【思考・判断・表現】物語の概要をつかみ、初発の感想を交流することができる。（ノートの記述、発言）
追究する	2	◎登場人物の人物像やその変化を捉えることができる。 登場人物の人物像はどのようなものだろうか。	○「私」「ヤンおばさん」「ルントウ」の人物像・心情の変化を捉える。	☆昔は生き生きとしていた様子だったのに、今は暗く、元気がない様子になってしまっているな。	【思考・判断・表現】それぞれの登場人物の特徴とその描かれ方の変化を捉えることができる。（ノートの記述、発言）
	1	◎故郷の情景描写から「私」の心情の変化と「希望」について考えることができる。 今、「私」の考える「希望」とはどのようなものだろうか。	○景色の観点から「私」の心情の変化を捉え、「希望」について自分なりの考えをもつ。	☆今現在の様子だけを見るのではなく、自分たちが希望をもって歩んでいけば、それが現実となっていくとうったえているのだな。	【思考・判断・表現】故郷の情景の描かれ方から感じられる「私」の心情の変化を捉え、新たな「希望」について考えることができる。（ノートの記述、発言）
	1	◎「私」の心情の変化と物語の構成・表現について考えることができる。 物語の内容と構成・表現との関わりはどのようなものだろうか。	○本文全体を振り返り、物語の展開の仕方や構成、表現を捉える。	☆「私」の心情の変化を伝えるのに、物語の構成や表現の仕方が密接に関わっているのだな。	【思考・判断・表現】「私」の心情の変化と物語の構成・表現について、関係性や表現の効果を考えることができる。（ノートの記述、発言）
まとめる	1	◎複数の翻訳文から物語の内容を伝えるために必要な語句・表現を考えることができる。 それぞれの翻訳文の違いはどのようなものだろうか。	○複数の翻訳文を読み、それぞれの違いについて観点を見い出しながら考える。	☆もともと同じ文章でも、それぞれの翻訳文で伝えようとしていることや伝え方に違いが出るのだな。	【知識・技能】「私」の心情の変化と物語の構成・表現について、関係性や表現の効果を考えることができる。（ノート等の記述、発言）
	1（本時）	◎物語に必要な語句・表現について自分の意見をもち、考えを伝え合うことができる。 物語の内容をより伝えられる表現はどのようなものだろうか。	○文章の表現の仕方を評価しながら読み、批評や考えたことなどを伝え合う。	☆それぞれの表現の仕方によって伝え方や伝わる内容が変わるが、自分はこういう表現がより伝わると考えるな。	【思考・判断・表現】文章の表現の仕方について評価し合い、考えを広げたり深めたりしながら、より内容が伝わる表現について自分の意見をもつことができる。（ノート等の記述、発言）

５　本時の展開　（７／７）

(1) 目　標

物語に必要な語句・表現について自分の意見をもち、考えを伝え合うことができる。

(2) 展　開

学習活動と予想される生徒の反応	指導上の留意点及び支援・評価
１　本時の課題をつかむ。 ・前時はそれぞれの翻訳文の違いを考えることができた。 ・今日は物語の内容をより伝えられる表現がどんなものかを考えるのだな。	○本時の課題と前時の学習のつながりを意識できるように、観点をもちながら表現を考えた前時の学習を振り返る。 ○自分なりの観点（根拠）をもって友達と意見交流して、考えを磨いていくことを確認する。
めあて：物語の内容をより伝えられる表現はどのようなものだろうか。	
２　今までに学習してきた物語の内容や背景をより伝えられるのは、という観点を基に、どの翻訳文の表現がよいか自分の考えをもつ。 ・言葉自体がわからなかったら伝わらないから、教科書の文章がよい。 ・当時の言葉遣いや人間関係がよりわかるように、多少難しい言葉が入っても別の翻訳文の表現を使うべきだ。	○共通の判断基準として、「今までに学習してきた物語の内容や背景・状況をより伝えられるのは」という観点を基にすることを確認する。 ＜その他、予想される観点等＞ ・　読んだときのわかりやすさ ・　登場人物の人間関係がわかる　　など ○個人で考える時間を確保し、自分なりに大事にする観点（根拠）をもたせることで、意見を交流する際に自分の意見を伝えられるようにする。
３　それぞれの考えを評価・検討し、物語の内容や背景をより伝えられる表現を考える。 ・みんなの考え方や理由にも納得させられるところがあるから、よりよい意見を取り入れていきたいな。 ・みんなの考えを比べると、この表現とこの表現を使っていったら、より内容や背景が伝わると思う。	○それぞれの考えのよさを評価・検討し、一つどれか正解を選ぶのではなく、よりよい表現を作り上げるようにすることを共有する。 ○様々な考え方を基に、最終的に自分なりの意見・観点（根拠）をもつことができるようにする。 【思考・判断・表現】 物語に必要な語句・表現について、複数の意見を評価・検討し、考えを深め、より適切な意見をもつことができる。　（ノート等の記述、発言）
４　評価・検討したあとの表現（意見）を発表し、その変化を捉えながら、単元の学習を振り返る。 ・私は、この表現がより内容が伝わると思う。もちろん、内容が難しくなくわかることも大事だが、当時だからこその雰囲気を伝える表現こそが、伝えるべきことだと思うから。	○いくつかのグループの意見を発表させ、それを聞きながら自分の表現と比べてみることで、何が必要かという観点や、その観点にふさわしい表現が何かを振り返ることができる。 ○複数の意見をふまえつつ自分の意見を見直すことで、いろいろな観点や幅広い表現の仕方に気づき、考えを広げたり深めたりするとともに、語感を磨き語彙を豊かにすることができるようにする。

＜振り返り＞

・私はもともとの教科書の本文が一番内容・背景が伝わりやすい文章だと考える。過去のいろいろな翻訳をふまえて本文ができていて、現代でも読みやすいから。

・私はいろいろな文章から、みんなの意見を基にして新たに作り上げた文章がいいと思う。難しい言葉があっても、その方が当時の雰囲気などがより伝わりやすいと思うから。

国語　故郷　【より内容を伝えられる表現について考えよう】　三年　組　氏名【　　】

☆**物語の内容をより伝えられる表現は、どのようなものだろうか？　↓　【表現（語彙）に着目する】**

一．それぞれのまとまりの【表現（語彙）】に着目し、どれが「より内容を伝えられる表現」か、自分の考えをもつ。
二．他の人の考えと比べながら、「より内容を伝えられる表現」にしていく。

《A．自分の考え》

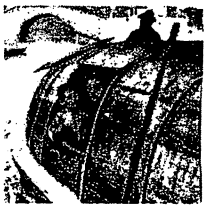
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
選ぶ表現							
なぜ？							
他の人の意見を聞いて							

☆自分の考えをもってみて

《B．他の人の考え》

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
選ぶ表現							
Ⅰ なぜ？							
選ぶ表現							
Ⅱ なぜ？							
選ぶ表現							
Ⅲ なぜ？							
選ぶ表現							
Ⅳ なぜ？							

☆他の人と交流してみて



故郷　魯迅　藤井省三訳　☆比較用　抜粋版　ふり　氏名

①

翌日、僕はさっそく鳥を捕まえてと頼んだ。閏土の答えはこうだった。

「無理だね。大雪が降らなくっちゃ。うちらの砂地では、雪が降ると、僕は雪かきしてちょっと地面を出してね、竹の大ざるを短い棒で支えて、屑籾を撒いてね、鳥が食べに来たところを、遠くから棒に結わえておいた縄を引く、すると鳥はざるの中というわけさ。なんでもいるんだ。稲鶏、角鶏、小鳩に藍背……」

僕はこうしていよいよ雪の日が待ち遠しくなるのだった。

閏土はこんな話もしてくれた。

「今は、寒すぎるけど、夏になったらうちらのところにおいで。昼は二人で海へ貝殻集めに行ったら、赤や緑のが何でもあって、鬼見怕も観音手もあるぜ。夜には僕は父さんとスイカ畑の番をするから、おまえも来いよ」

「スイカ泥棒を捕まえるの？」

「はずれ。喉が渇いてりゃ通りがかりにスイカを一個食べるなんて、うちらのところじゃ泥棒なんて言わない。捕まえるのはアナグマやハリネズミに猹だ。月夜の畑で、耳を澄ますと、カサコソ音がするのは、猹がスイカを囓ってるんだ。そしたら刺叉を持ってそっと近づき……」

このときの僕は猹とは何か知らなかったが――今でも知らないのだが――なんとなく小犬のような姿だがひどく恐そうなものと思っていた。

「人に噛みついたりしないの？」

「刺叉があるだろう。近づいて、猹を見つけたら、グサッと刺すんだ。でもこいつは利口だから、こっちに向かって飛び出してきて、股の下をすり抜けてしまう。油を塗ったみたいにツルツルの毛をしてるし……」

②

「やったあ！で、閏土――彼はどうしてるの？……」

③

ある日の底冷えのする午後のこと、僕が昼ご飯を終えて、お茶を飲んでいると、外に誰か人が来た気配がするので、後ろを振り向いた。相手を見て、あっと驚き、急いで立ち上がり、迎えに出た。

この客こそ閏土だった。ひと目で閏土だとわかったが、僕の記憶の中の閏土とも違っていた閏土。彼の背丈は倍になり、昔の日焼けした丸顔は、すでに土気色に変じており、さらに深い皺が刻まれていた。目も彼の父親そっくり、周囲が真っ赤に腫れているのは、海辺の農民の多くは、一日中海風に吹かれているので、こんな顔つきになってしまうからで、それは僕にもわかっていた。彼はボロボロの毛織り帽をかぶり、薄っぺらな綿入れを着ているだけで、縮こまって全身を丸めている。手には紙包みと長い煙管を提げているが、その手も僕が覚えている丸々として温かい手ではなく、太く節くれ立ちひびだらけで、まるで松の木の皮のよう。

僕はこのときうれしさのあまり、なんて言ってよいのかわからず、ひとことこう言った。

「わあ！閏兄ちゃん――いらっしゃい……」

続けて話したいことが山ほど、次々と湧き出てきた。角鶏、跳び魚、貝殻、猹……しかし何かに邪魔されているようで、頭の中をグルグル駆けめぐるばかり、言葉にならないのだ。

④

立ちつくす彼の顔には、喜びと寂しさの色が入り交じり、唇は動いたものの、声にならない。やがて彼の態度は恭しいものとなり、はっきり僕をこう呼んだのだ。

「旦那様！……」

僕は身ぶるいしたのではないか。僕にもわかった、二人のあいだはすでに悲しい厚い壁で隔てられているのだ。僕も言葉が出てこなかった。

彼は振り向いて「水生、旦那様に叩頭のご挨拶だ」と言うと、彼の影に隠れていた息子を引っ張り出したが、それこそまさに二十年前の閏土であり、ただ顔色がやや黄色くやせ気味で、銀の首輪もかかっていなかった。「これは家の五男ですが、世間知らずで、ご挨拶もできません……」

母と宏児が二階から降りてきたのは、僕たちの話し声が聞こえたからだろう。

「大奥様。お手紙はとっくに頂戴しました。俺も本当にうれしかったですよ、旦那様のお帰りだと知って……」閏土が言った。

「なんだね、おまえさんたら遠慮なんかしちゃいけないよ。二人は昔は兄弟同様の仲だったでしょう。これまで通り迅坊っちゃんと呼んだらいいさ」母は機嫌よく言った。

「いやもう、大奥様は本当に……それじゃあ世の中の決まりはどうなっちまいます。あのころは子供で、道理もわきまえず……」閏土はそう言いながら、水生に今度は拱手をさせようとしたが、その子はいっそう恥ずかしがり、父の背中にピタリと張り付いて離れようとしない。

「この子が水生かい？五男坊だろう？初めて会う人ばかりなんだ、はにかむのも無理はないさ。やっぱり宏児がこのこと遊んでおあげ」と母が言った。

⑤

船が進むにつれ、両岸の青山は黄昏の中で、濃い黛色となり、次々と船尾へと消えていく。

宏児は僕といっしょに船窓に寄りかかり、外の暗くなっていく風景を見ていたが、急にこんなことを聞いたのだ。

「伯父さん！僕たちいつ帰ってくるの？」

「帰ってくる？まだ引っ越してもいないのにもう帰りたくなったのかい」

「だって、水生が家に遊びに来てって言うんだもん……」宏児は黒い瞳を大きく見開き、考えごとに夢中になっている。

僕と母とはしばし茫然として、再び閏土の話を始めた。

⑥

僕は希望について考えたとき、突然恐ろしくなった。閏土が香炉と燭台を望んだとき、僕が秘かに苦笑させたのは、彼はいつも偶像を崇拝していて、それを片時も忘れないと思ったからだ。いま僕の考えている希望も、僕の手製の偶像なのではあるまいか。ただ彼の願いは身近で、僕の願いは遥か遠いのだ。

ぼんやりとしている僕の目の前では、一面に海辺の深緑の砂地が広がり、頭上の深い藍色の大空には金色の満月がかかっている。僕は考えた――希望とは本来あるとも言えないし、ないとも言えない。これはちょうど地上の道のようなもの、実は地上に本来道はないが、歩く人が多くなると道ができるのだ。

⑦

故郷　　魯迅　　井上紅梅訳　　☆比較用　　抜粋版

井

氏名

①

次の日わたしは彼に鳥をつかまえてくれと頼んだ。

「それは出来ません。大雪が降ればいいのですがね。わたしどもの沙地の上に雪が降ると、わたしは雪を掻き出して小さな一つの空地を作り、短い棒で大きな箕を支え、小米を撒きちらしておきます。小鳥が食いに来た時、わたしは遠くの方で棒の上に縛ってある縄を引くと、小鳥は箕の下へ入ってしまいます。何でも皆ありますよ。稲鶏、角鶏、鳩、藍背……」

そこでわたしは雪の降るのを待ちかねた。閏土はまた左のような話をした。

「今は寒くていけませんが、夏になったらわたしの処へ被入っしゃい。わたしどもは昼間海辺に貝殻取に行きます。赤いのや青いのや、鬼が見て恐れるのや、観音様の手もあります。晩にはお父さんと一緒に西瓜の見張りに行きますから、あなたも被入っしゃい」

「泥棒の見張をするのかえ」

「いいえ、旅の人が喉が渇いて一つぐらい取って食べても、家の方では泥棒の数に入れません。見張が要るのは猪、山あらし、土竜の類です。月明りの下でじっと耳を澄ましているとララと響いて来ます。土竜が瓜を噛んでるんですよ。その時あなたは叉棒を攫つかんでそっと行って御覧なさい」

わたしはそのいわゆる土竜というものがどんなものか、その時ちっとも知らなかった。

――今でも解らない――ただわけもなく、小犬のような形で非常に猛烈のように感じた。

「彼は咬みついて来るだろうね」

「こちらには叉棒がありますからね。歩いて行って見つけ次第、あなたはそれを刺せばいい。こん畜生は馬鹿に利巧な奴で、あべこべにあなたの方へ馳け出して来て、跨の下から逃げてゆきます。あいつの毛皮は油のように滑ッこい」

②

「そりゃ面白い。彼はどんな風です」

③

非常に寒い日の午後、わたしは昼飯を済ましてお茶を飲んでいると、外から人が入って来た。見ると思わず知らず驚いた。この人はほかでもない閏土であった。わたしは一目見てそれと知ったが、それは記憶の上の閏土ではなかった。身の丈けは一倍も伸びて、紫色の丸顔はすでに変じてどんよりと黄ばみ、額には溝のような深皺が出来ていた。目許は彼の父親ソックリで地腫れがしていたが、これはわたしも知っている。海辺地方の百姓は年じゅう汐風に吹かれているので皆が皆こんな風になるのである。彼の頭の上には破れた漉羅紗帽が一つ、身体の上にはごく薄い棉入れが一枚、その着こなしがいかにも見すぼらしく、手に紙包と長煙管を持っていたが、その手もわたしの覚えていた赤く丸い、ふっくらしたものではなく、荒っぽくざらざらして松皮のような裂け目があった。

わたしは非常に亢奮して何と言っていいやら

「あ、閏土さん、よく来てくれた」

とまず口を切って、続いて連珠の如く湧き出す話、角鶏、飛魚、貝殻、土竜……けれど結局何かに弾かれたような工合になって、ただ頭の中をぐるぐる廻っているだけで口外へ吐き出すことが出来ない。

彼はのそりと立っていた。顔の上には喜びと淋しさを現わし、唇は動かしているが声が出ない。彼の態度は結局敬い奉るのであった。

④

「旦那様」

④

と一つハッキリ言った。わたしはぞっとして身顫いが出そうになった。なるほどわたしどもの間にはもはや悲しむべき隔てが出来たのかと思うと、わたしはもう話も出来ない。

彼は頭を後ろに向け

「水生や、旦那様にお辞儀をしなさい」

と背中に縋れている子供を引出した。これはちょうど三十年前の閏土と同じような者であるが、それよりずっと痩せ黄ばんで頸のまわりに銀の輪がない。

「これは五番目の倅ですが、人様の前に出たことがありませんから、はにかんで困ります」

母は宏兒を連れて二階から下りて来た。大方われわれの話声を聞きつけて来たのだろう。閏土は丁寧に頭を低げて

「大奥様、お手紙を有難く頂戴致しました。わたしは旦那様がお帰りになると聞いて、何しろハアこんな嬉しいことは御座いません」

「まあお前はなぜそんな遠慮深くしているの、先にはまるで兄弟のようにしていたじゃないか。やっぱり昔のように迅ちゃんとお言いよ」

母親はいい機嫌であった。

「奥さん、今はそんなわけにはゆきません。あの時分は子供のことで何もかも解りませんでしたが」

閏土はそう言いながら子供を前に引出してお辞儀をさせようとしたが、子供は羞しがって背中にこびりついて離れない。

「その子は水生だね。五番目かえ。みんなうぶだから懼るのは当前だよ。宏兒がちょうどいい相手だ。さあお前さん達は向うへ行ってお遊び」

⑤

船はずんずん進んで行った。両岸の青山はたそがれの中に深黛色の装いを凝らし、皆連れ立って船後の梢に向って退く。

わたしは船窓に凭って外のぼんやりした景色を眺めていると、たちまち宏兒が質問を発した。

「叔父さん、わたしどもはいつここへ帰って来るんでしょうね」

「帰る？　ハハハ。お前は向うに行き著きもしないのにもう帰ることを考えているのか」

「あの水生がね、自分の家へ遊びに来てくれと言っているんですよ」

宏兒は黒目勝ちの眼をみはってうっとりと外を眺めている。

わたしどもはうすら睡くなって来た。そこでまた閏土の話を持出した。

⑥

わたしはそう思うとたちまち羞しくなった。閏土が香炉と燭台が要ると言った時、わたしは内々彼を笑っていた。彼はどうしても偶像崇拝で、いかなる時にもそれを忘れ去ることが出来ないと。ところが現在わたしのいわゆる希望はわたしの手製の偶像ではなかろうか。ただ彼の希望は遠くの方でぼんやりしているだけの相違だ。

夢うつつの中に眼の前に野広い海辺の緑の沙地が展開して来た。上には深藍色の大空に掛るまんまろの月が黄金色であった。

希望は本来有というものでもなく、無というものでもない。これこそ地上の道のように、初めから道があるのではないが、歩く人が多くなると初めて道が出来る。

⑦